

JELA NEWS

ジェラ ニュース 第48号 2019年4月15日発行 発行責任者 渡辺 薫

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援／世界の子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア(祈りのたて琴)／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。 マタイによる福音書25章35～36、40節



カンボジアに7つめのプレスクール完成!

この号にはこんな記事が…

【p2】カンボジアのプレスクール支援報告 /2019 年米国グループ・ワークキャンプ(最終募集) 【p3】板橋ジェラハウス建築状況のお知らせ / 奨学金 現役牧師が有機農法を学ぶ 【p4】リラ・プレカリア特別講演会報告 【p5】チャリティコンサート 2019 年度スケジュール& 奏者からの抱負 【p6】政治経済的視点を踏まえた難民保護 第 10 回(山本哲史) 【p7】「母子でも学べる JELA のラーニング・プログラム」(斎藤由里阿) 【p8】2018 年度 ご寄付によって実施した事業◆ 支援者一覧 ◆ 編集後記ほか

35人の子どもたちの笑顔! プレスクールがカンボジアに 完成

JELAは世界の子ども支援として、主にインドとカンボジアを支援しています。昨年も、カンボジアのパートナーLife With Dignity(=LWD、尊厳ある生活)を通じて行なわれたJELAの支援によって、カンボジアの農村にプレスクール(未就学児の学校)が完成しました。場所は、コンポンチュナン州Teuk Phos地区Kraing Skear Kandal村です。同地の35人(内18人が女子)が通学しはじめました。

2012年以来、JELAとLWDが学校に通うことが困難な僻地に住む子どもたちのために建設したプレスクールは、これで7棟目になります。

2年に一度実施しているカンボジア・ワークキャンプを通じて、JELAは日本人ボランティアを派遣し、建築したプレスクールの修繕や、環境整備などにも取り組んでいます。昨年のカンボジア・キャンプではJELAの支援で完成したプレスクールの隣にトイレを作りました。また、皆様からのご支援により、プレスクールの校舎だけでなく、教科書、学用品、制服などの提供が可能となる年もありました。

現地では、良い変化も起きています。この働きを通して、地域コミュニティの評議会・委員会が教育の重要性を理解し、子どもたちを学校に通わせるよう親に促すようになりました。それを受けて、教育にかかる費用の一部を自己負担する親も増え始めました。

JELAとLWDは共同で、カンボジアの将来を担う子どもたちのために、できる限りプレスクールの支援を継続していく方針です。カンボジア支援のために、引き続きお祈りとご支援をいただけましたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。



締め切り迫る! 米国ワークキャンプ2019 参加者募集中!!

- ◆派遣期間: 2019年7月24日(水)~8月6日(火)
- ◆テーマ: Relentless 「ハンパない!」(仮訳)
- ◆内容: イリノイ州で一週間のワークキャンプ(家屋修繕、聖書の学び等を通し信仰的・人間的成長を促す催し)に参加し、近隣の州でホームステイもします。
- ◆年齢制限: 2019年8月1日現在の年齢が14~20歳であること。
- ◆参加費用: 20万円
*友達を誘って参加する場合、本人・友人の参加費を5千円ずつ割引きます!
- ◆問合せ・申込用紙請求先:
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
日本福音ルーテル社団(JELA)米国ワークキャンプ係
電話:03-3447-1521(平日9:00~17:00)
FAX:03-3447-1523
E-mail:jela@jela.or.jp
- ◆締切:2019年4月末日必着
※募集要項の詳細は、ホームページ(www.jela.or.jp)でもご覧になれます。皆さまの参加を心よりお待ちしております。

日本初の民間難民シェルター 板橋ジェラハウス いよいよ完成へ!

JELAは、日本初の民間による無償の難民シェルター「板橋ジェラハウス」(築46年の木造)の建て替え工事を行っています。昨年10月11日に起工式、12月12日には、柱・梁・棟などの構造体を組上げる、いわゆる上棟が執り行われました。

本紙編集の3月20日現在、建物の外観もほぼ整って参りました。完成は3月末日なので、本紙がお手元に届くころには、すべてが新しいジェラハウスが板橋の地に誕生していることでしょう。

改築後の板橋ジェラハウスは、木造2階建てですが、耐震強度を高めた建物になっています。難民の方々が安心して生活できる場となると信じています。これまで通り、難民(申請者を含む)の方へ

無償でシェルターを提供し、電気・ガス・水道などの光熱費もJELAが負担して参ります。

新しい板橋ジェラハウスについては、次号にて詳しくお伝えする予定です。どうぞ期待ください。

JELAでは、随時難民支援のための献金を募っています。また難民支援のボランティアに興味のある方は、JELA(TEL:03-3447-1521/FAX:03-3447-1523/eメール:jela@jela.or.jp)までご連絡ください。関連記事として、難民の方に日本語を教えるボランティアをして下さっている齋藤由里阿さんの記事を7頁に掲載しています。

引き続き、ご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。



宣教の助けになる「何か」 奨学金で現役牧師が有機農法を学ぶ

JELAが毎年奨学金支援を行っている学校があります。栃木県那須塩原市にあるアジア学院(ARI)です。ARIは、主に発展途上国の農村指導者の育成を行う専門学校です。昨年12月には、JELAの奨学金で学んだインドネシアからの留学生、クラオディウス・ブディアントさんが無事にARIを卒業しました。

クラオディウス・ブディアントさんは、インドネシアの北中央ジャワ・キリスト教会(Christian Church From Northern Central Java =GKJTUカルヴァン派)の牧師でした。クラオディウスさんは、「神と隣人を愛することを説いてきたが、アジア学院に来たことで土を愛することの大切さも学んだ」、「神が創造した地球(=土)は人間に必要不可欠なものであり、かけがえのない土を生かす有機農法は神の御心にかなうものだと思う」と熱く語っていました。

これまでもJELAの奨学金で多くのキリスト者が学んできましたが、現役の牧師が有機農法を学ぶというのは、大変意味のある支援となりました。クラオディウスさんいわく、発展途上国の教会は、

宣教に際しては、必ずと言ってよいほど、地域に貢献する「何か」が必要とされるので、土を生かす有機農法をインドネシアに持ち帰ることは、宣教の大きな助けとなることとです。

クラオディウスさんは、本職である牧師として牧会に励みながら、ARIで培った農村開発の知識を用いつつ、地域に必要とされる働きをしたいと話しています。

今回の支援は、JELAの奨学金事業と宣教への思いが結びついたと好事例となりました。

JELAでは、毎年数名の方へ、返済義務のない給付型奨学金の支援を行っています。皆様からの奨学金事業へのご支援に感謝しつつ、引き続きのお祈りとご支援をお願いいたします。



森下理事長とクラオディウス氏



リラ・プレカリア修了生対象セミナー 「苦痛のサインとエンドオブ ライフ(終末)期の音楽の 使い方」について

1月8日、ジェラミッションセンターを会場にキャロル・サック宣教師(リラ・プレカリア創始者)主催のリラ・プレカリア研修講座修了生を対象とした特別セミナー「苦痛のサインと終末期の音楽の使い方」が開かれました。講師は、シカゴで活動するミュージック・サナトロジスト(認定音楽死生学士)のマーガレット・パスクエシさん(写真中央)とトニー・ペダーソンさん(写真右)です。



マーガレットさんは、音楽死生学を習得する「安らぎの杯プロジェクト」(Chalice of Repose Project School of Music Thanatology)と出会い、技能を披露するための音楽から、人間の存在の根源に関わる音楽のあり方へと導かれ、16年間、ミュージック・サナトロジストとしてシカゴの大規模ホスピスに勤務してきました。夫のトニー・ペダーソンさんは、M.T.A.I.(国際ミュージック・サナトロジー協会)の会長を務めています。二人は、終末期にある何千人もの患者に向き合い、その実践報告を医療従事者などに向けて発信しています。

1970年代にアメリカのホスピス運動に端を発したミュージック・サナトロジー(音楽死生学)は、一義的には臨末期の患者を、二義的にその家族を対象とします。ベッドサイドで、歌声とハーブの音と響きを活用し、患者の状態に呼応するこの臨床実践は、現在では緩和ケアの一分野として、終末期の患者に接する人々へ方法論を提示しています。

実践目標は、患者が人生の満了(=「死」)へと平安のうちに進むことを助けること

であり、医療従事者からは、患者の尊厳を保つ働きであると評価されています。

マーガレットさんによると、ミュージック・サナトロジーが流行りすたりのある単なるスピリチュアル・ケアに終わらず、終末期のケア領域の一つの専門分野として認知されるに至った理由は、その「客観性」にあります。ミュージック・サナトロジーでは、対面する患者の脈拍、呼吸の種類、体温、表情や四肢の緊張状態が点数により数値化されるからです。これにより、個人の主観に患者を従わせる危険性を最大限に防ぐとともに、医療従事者へ明確な報告や、助言を仰ぐことが可能となります。それに加え、ミュージック・サナトロジストは、音楽提供前と提供後の変化を数値化して分析します。音楽提供が進むとともに変容する患者の脈拍や呼吸、体温といった生命にかかわるサインを注意深く観察することにより、それを患者からのフィードバックとしながら、絶えず患者の状態に合わせたケアを行うことができます。

医療の現場で根治を目指す治療ではなく緩和ケアという選択が生まれたように、「死」に対しても「では、どのように逝くのか」が再考される時代となりました。分析的アプローチという強みを持つミュージック・サナトロジーは、今後の日本においても、遠からず、終末期ケア領域の大きな潮流なることでしょう。

【聴講者からの感想】

♪ ミュージック・サナトロジーの観点からは、終末期の患者が経験する痛みには、肉体的・感情的痛みだけでなく、霊的(存在的)痛みが含まれるとされていると知りました。患者の不安、不眠などの肉体的・感情的痛みを和らげること



は、鎮静剤等の処方で解決されることもあるでしょう。

しかし、霊的な痛みを和らげる真の処方箋は、聖書の神との和解であるとの立場に立った時、2006年から2018年までJELAにおいて開設された、キャロル・サック宣教師によるリラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座は、大変貴重な神の財産だったと思います。12年間に世に送り出された38名の修了生たちもまた、神の財産として、それぞれが置かれた場所で、パストラル・ハーブ(音楽を用いたキリスト教的看取り)の真の価値を継承・実践して下さることを願っています。

♪ 長く臨床現場で経験を積まれた方のお話を聞く貴重な機会でした。二つの「客観的な指標」- ①Respiratory Distress Observation Scale(RDOS):一分間の心拍数・呼吸数および呼吸パターン、呼吸時の鼻腔の様子などで状態を判断するもの ②FLACC Pain Scale:表情や肢体の状態を観察し痛みを数値化するもの- これらを使って、どのように患者さんの状態を判断するかを具体的に知ることができました。また終末期の呼吸の様子の映像にあわせてハーブと歌の実演をしてくださり大変参考になりました。呼吸に寄り添い「ともにいること」の大切さをあらためて感じ、今後の活動への大きな助けと励ましをいただきました。

(*) 「音楽死生学」とは、英語の「Music Thanatology =ミュージック・サナトロジー」を和訳したものです。これは1990年代初頭に米国で、テレーズ・シュローダー・シーカー氏(Therese Schroeder-Sheker)が始めた学問で、主に歌とハーブを使って身体・精神・霊的な苦痛の緩和を目的としたものです。



JELAは毎年5~7月の週末に、日本福音ルーテル教会・世界宣教委員会との共催で、「世界の子ども支援チャリティコンサート」を開催しています。16回目の今年は、全国11会場を巡り、ヴァイオリンの真野謡子さん(4回目)とチェロの松本恒瑛さん(初登場)によるデュオをお届けします。

演奏者のお二人からコンサートに向けての抱負が届きましたのでご紹介いたします。

真野謡子(まの・ようこ)さん

四度目の出演になります、ヴァイオリンの真野謡子です。今年も再び、「世界の子ども支援チャリティコンサート」にて演奏出来ますこと、大変嬉しく思います。

今回は、チェリストの松本さんと共に、ヴァイオリンとチェロのデュオをお届けします。松本さんとは、以前より室内楽などで共演したこともありますが、デュオは初共演です。8本の弦によって奏でられる「音の対話」を体感してください!

北は北海道、南は熊本まで、皆様と素敵な時間を共有できたら幸いです♪是非いらっしゃって下さい!

松本恒瑛(まつもと・つねあき)さん

初めてJELAで演奏させていただきます。真野さんとのDuoで演奏出来るのを楽しみにしております。

ヴァイオリンとチェロが奏でる、繊細かつ大胆な音楽を皆様楽しんで頂き思います。2つの楽器のために書かれた曲は

数多くありますが、なかなか聴く機会はなく、新しい出会いがある事は間違いありません。今回はチェロの曲の中でも重要な位置をしめる、バッハの無伴奏チェロ組曲の中から、プレリュードを演奏したいと思っております。この曲は、実は非常に高い技術が求められる曲で、海外の巨匠と呼ばれる人達の中でも一目置かれる曲です。

Duo、Solo、共に皆様に楽しんで頂けるプログラムを組んでおりますので、コンサートを楽しみにして頂きたいと思えます。

演奏予定曲目:

J. S. バッハ:「無伴奏チェロ組曲」より、W. A. モーツァルト:ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲 ト長調 KV.423、セルヴェン/ギース:「神よ、王を守りたまえ」による華麗なる変奏曲 他 (※都合により変更となる場合があります)

【スケジュール】

- 5月11日(土) 午後2:00
日本福音ルーテル松本教会
〒390-0862 長野県松本市宮瀬1-4-9
- 5月12日(日) 午後1:30
日本福音ルーテル都南教会
〒154-0002 東京都世田谷区下馬6-45-3
- 5月25日(土) 午後1:30
日本福音ルーテル帯広教会
〒080-0023 北海道帯広市西13条南13-1-42
- 5月26日(日) 午後1:00
日本福音ルーテル大森教会
〒143-0023 東京都大田区山王2-18-3

- 6月15日(土) 午後2:00
日本福音ルーテル富士教会
〒416-0912 静岡県富士市加島町7-14
- 6月16日(日) 午後2:00
日本福音ルーテル三原教会
〒723-0016 広島県三原市宮沖3-8-18
- 6月23日(日) 午後1:30
日本福音ルーテル保谷教会
〒202-0022 東京都西東京市柳沢2-13-11
- 6月29日(土) 午後2:00
日本福音ルーテル刈谷教会
〒448-0856 愛知県刈谷市寿町4-219
- 6月30日(日) 午後1:30
日本福音ルーテル名古屋めぐみ教会
〒457-0006 愛知県名古屋南区鳥栖1-15-32
- 7月6日(土) 午後1:00
日本福音ルーテル唐津教会
〒847-0056 佐賀県唐津市坊主町463
- 7月7日(日) 午後2:00
日本福音ルーテル熊本教会
〒860-0844 熊本県熊本市中央区水道町1-21

(※開演時刻は都合により変更となる場合があります。JELAニュースブログ、もしくは教会にて最新の情報をお確かめください)

入場無料です。各会場では席上献金を募り、集まった献金はJELAの実施する「世界の子ども支援」事業のために用います。ぜひ、ご家族・ご友人をお誘い合わせのうえ、お近くの会場に足をお運びください。皆さまにお会いできるのを楽しみにしています。

政治経済的視点を踏まえた難民保護
第10回
山高きが故に貴からず、
樹あるを以て貴しとす

元東京大学特任教授
山本 哲史



この連載では、人々が難民保護のための法を守るように仕向ける工夫について考えてきました。最終回となる今回は、難民保護は損か得か、という疑問について結論を出したいと思います。

冒頭の文章は、昔の寺子屋の教科書の書き出しに使われていたものです。この場合、樹に価値があるので山に価値があるのであって、高く美しいことは、まあそれはそれでいいんでしょうけど、価値とは関係ないよね、というような意味です。実を取れ、という話です。絶対的な真理ということではなく、一つの考え方ですね。

このシリーズでは、政治経済的視点、という話をしてきたわけですが。難民保護というと人道的、あるいは人権、というような視点で考えるのが常識なんでしょうし、私自身も国際法学者としてそのような論文を書いてきました。それはそれで大切なことなんですけど、何か足りない。それは、本音の議論、つまり難民保護は損か得か、というような観点も、やはり遠慮せずに考えて議論すべきではないか、というような問題意識でした。

もちろん、人道問題や倫理の話も、揶揄するようなことにははいけません。難民保護の損得、という話は、結局のところ、物事を見た目や印象で語るのではなく、多角的に知ることが重要だ、というほどの意味です。ジョン・ステュアート・ミル、という偉人がおっしゃるには、人が物事についてその全体像を知るためには、自分と違う立場からの意見を聞くことが必要だそうですね。常識や、逆にタブー、偏った見方、等々というものは、学問の世界の言葉では、論点搾取(ろんてんさくしゅ)と呼ばれて、よろしくないこととされています。

さて、前回(46号掲載)からだいぶ間が空いてしまいましたが、日本の外国人労働

者政策が、かなり大きく変わり始めたようだ、という話でした。そして、そのことが難民保護にも何か変化をもたらすのか否か、というあたりのことを考えていましたね。結論から言うと、おそらく変わります。

誤解を恐れずに簡潔さを追求して言いますと、外国人の数が増えるということは、それに応じた環境や制度も整ってくるということで、難民にとっても日本で生活しやすくなるだろう、と思います。難民保護という場合に、人間ですから生活の場が必要なんです。仕事や買い物、娯楽、学校、誰だって生活するうえで最低限の環境が必要ですよ。それがさらに整ってくるだろう、と。旅行者としてではなく、一定程度の長さ日本で生活し、場合によっては人生の大半を過ごすという外国人が増えるのですから。その人たちが求める環境は徐々にではあれ整ってゆくでしょう。

逆に外国人排斥、というような感情や運動も出てくるかもしれませんね。外国人を一度入れてしまうと取り返しがつかない、という意見の人々からすると、試しに入れてみる、という主張や考え方自体が脅威になるわけです。みなさんはどう思いますか？

そういう時、せつかく世の中には学問というものがあって、日々それを研鑽して内容を高め続けている(はずの)研究者たちがいるので、どうなんでしょうかと、聞いてみよう、というような発想です。奸風発迷(かんふうはつめい)、ちょっと欲が出てきて迷いが止まらない、何か得なんだろう、ぐるぐるぐる、誰にでもあることです。そんな時こそ研究者に聞いてみよう、となります。

このシリーズを有馬みきさんと構想し、森川前事務局長と相談して連載開始となったのは2015年8月(37号)のことでした。そのわずか半年後に、ノーベル経済学賞を数年前に受賞したイェール大学のシラー教授は、自らが会長を務めるアメリカの経済学会で、会員らに対し、シリア難民のことについて経済学的にぜひ研究してください、と呼びかけました。これに呼応する形で、注目すべき内容の研究がいくつか発表されました。たとえば、シリア難民が大量に流入した国では、景気がよくなり、国民の雇用も促進されたことをデータから結論付けた研究。安易に一般化はできませんし、日本の場合もそうなのかわかり

ません。ただ、先入観や印象論ではわからないこともある、ということです。

このシリーズの着眼は、間違っていないかどうか、世界のトレンドを先取りしてしまいましたね。企画を快く受け入れてくださった森川前事務局長のご達観であると思います。

とはいえ、大したことは語れませんでしたが。重要なのは、意識を持つということです。これだけでだいぶ違います。法であれば、ただ守りなさい、というのではなく、守ることで世の中のメカニズムがどういう風に動いているよ、その原因と結果と仕組みはこうだよ、という意識。その意識さえ持っていれば、ニュースひとつ、目にした時の受け止め方が違ってきます。(完)

.....

本連載記事バックナンバーのご紹介

約3年間にわたって連載してまいりました「政治経済的視点を踏まえた難民保護」が今回で完結するにあたり、これまでの記事のタイトルと、それを載せている『ジェラニュース』の号数・発行日を以下に示します。まとめてお読みになれば、本連載の意図がよりよく理解できるのではないかと存じます。

- 序章：難民問題への政治経済的側面からのアプローチ 第37号(2015年8月15日発行)
- ※JELAを会場に行われた「難民保護の勉強会」(主催：社会福祉法人日本国際社会事業団)のレポートです。
- 第一回：政治経済的視点を踏まえて難民保護を考える 第38号(2015年12月15日発行)
- 第二回：法にも得手不得手がある 第39号(2016年4月15日発行)
- 第三回：ドイツの実践から(1) 第40号(2016年8月15日発行)
- 第四回：ドイツの実践から(2) 第41号(2016年12月15日発行)
- 第五回：難民条約と入国管理 第42号(2017年4月15日発行)
- 第六回：移動という視点で見た難民 第43号(2017年8月15日発行)
- 第七回：武装難民が来たら射殺する？ 第44号(2017年12月15日発行)
- 第八回：難民認定審査が甘いとうなる？ 第45号(2018年4月15日発行)
- 第九回：外国人労働者の制度変更で難民保護が変わる？ 第46号(2018年8月15日発行)

「JELA NEWS」バックナンバーは、JELAのホームページでご覧いただけます。

左記のQRコードからも簡単にアクセスできます。印刷したものをご希望の場合、送付先をご連絡いただくと、該当箇所のコピーを郵送いたします。



難民支援ボランティア

JELAは都内に2カ所、難民の方(申請者を含む)が無料で住めるシェルター「ジェラ(JELA)ハウス」を運営しています。JELAハウスでは、家賃のほか、電気・水道・ガスが無償提供するなど、難民の方の生活の次のステップを応援しています。提供するサービスの一つに、日本語クラス(ラーニング・プログラム)があります。日本語クラスでは、ボランティアの講師により個々の語学レベルとニーズに応じた学びの場が提供されます。2018年11月から難民の母子に日本語を教える下さっている齋藤由里阿さんにご寄稿いただきました。

「母子でも学べる JELA ラーニング・プログラム」

齋藤由里阿(東京大学法学部4年)



週に一度、東京のとあるレストランで生徒さんと私は授業をします。「今日はまず日本語で注文してみようね。」

私が出て早々問題を出すと、彼女は面食らいながらも懸命に記憶をたどって答えます。「Drink bar, オネ、オネガ、イスマス。」こうして授業が始まります。私たちは昨年11月頃からJELAラーニング・プログラムを始めました。

授業内容は主にスピーキングです。テキストのダイアログを使って教えています。赤ちゃんのいる彼女にとって、ベビー用品を買ったり病院に行ったりするために日本語での会話は死活問題です。そのためライティングやリーディングに優先してスピーキングを教えています。

日本語を教えていてまず大変なのは、彼女の話すdialect(方言)を理解することです。彼女の母国語は英語ですが、彼女の話す英語は私の知るそれではなく、慣れるまでは聞き取ることも一苦労でした。悩みの種はそればかりではありません。彼女の赤ちゃんがしょっちゅう大声で泣いては私たちを困らせるのです。私はレストランを利用させていただくのを拒まれてしまうのではないかと気が気ではありませんでした。ですが、嬉しいことにそのようなことは起きませんでした。今では私たちはレスト

ランの方々とはすっかり顔なじみです。

日本語を教える合間には彼女の体験談や母国の文化などについて尋ねることもあります。中でも彼女が日本に来たばかりの頃の苦労は印象深いものでした。彼女は日本で出産を迎えることになったのですが、強いストレスのためか3ヶ月もの早産となり、赤ちゃんはしばらく保育器の中で育ちました。初めて訪問した日本の寒さ、難産、赤ちゃんが未熟児として生まれた時の絶望感。これらを聞いた時、私は自分の勘違いを思い知らされました。私は彼女ら難民の方々に「難民」という一括りの枠で捉えていました。しかし、実際には、難民の方一人一人が様々な問題を抱えつつ、様々な人生を歩いているのです。

この活動を通して感じたこと、それは、私はあまりにも日本に住む難民の方々について無知であったということです。私が日本に住む難民の方々のことを知ったのは、数年前に欧州のシリア難民について調べた際のことでした。それは本当に偶然で、この時まで私は日本に難民が存在することすら知りませんでした。しかし彼女らについて調べていくうち、彼女らがどれほど過酷な状況にあり、この問題がどれほど深刻であるかわかってきました。彼女らと関わってみたいと思い、インターネットを通してたどり着いたのがJELAラーニング・プログラムです。そして、この活動を通じ、さらにたくさんの方々の新たな発見をさせていただきました。

重大な問題は、このことが私に限った話ではないということです。私が家族や友人に私の活動について話すと、たいいていの方は日本に難民が存在すること自体に驚きます。先日参加させていただいたJAR(難民支援協会)の難民講座でも、参加者はもともと難民に興味のある方々であるにもかかわらず、多くの方々が日本に住む難民の方々の現状を初めて知り、驚いていらっしゃいました。現代日本では、外国人労働者や外国人観光客が注目を浴びる一方で、難民は未だに影の存在にあると言えるのではないのでしょうか。

そして、このような状況を改善するために、JELAラーニング・プログラムが役に立っていると感じています。以前、別の団体で難民支援をされている方に、レストランの方々が難民の母子を受け入れてくださって助かる、というお話をしたことがあります。この話を聞いた彼の一言は、私にとっ

て興味深いものでした。「それは横に日本人であるあなたがいたからではないか」、彼はこのように述べました。この一言を聞いた時、私はJELAラーニング・プログラムを通じて難民の方々や日本人の方々が理解し合う橋渡しをすることができるのではないかと気づいたのです。

こうした経験から、私はJELAラーニング・プログラムには幾つかの長所があると思うようになりました。まず、このプログラムは個別のニーズに柔軟に対応できるという点です。私の生徒のように赤ちゃんのいるお母さんは、大勢のクラスで日本語を学ぶことが難しくなってしまいます。しかし、このプログラムでは生徒さんに個別に授業を行うことで生徒さんの状況に応じた対応することができます。

また、JELAラーニング・プログラムのボランティア参加者は、難民の方々に日本語を教えると同時に、彼らとの交流を通じて、彼らがどのような場面で苦労を感じているか、どのようなバックグラウンドを持って日本に来たのかを知ることができます。そして、家にこもりがちなのを外に連れ出し、日本社会との関わりを作るお手伝いをすることもできます。JELAラーニング・プログラムは、私たちボランティア参加者が日本に住む難民の方々に日本社会に発信することを通じ、まだ彼らのことを知らない人たちに彼らのことを伝えていく可能性のあるプログラムだと考えています。私たちの活動が、より多くの日本人に難民の方々への理解や支援を広げていく一助となり、さらに行政を変え得るような世論の形成へと繋がっていくことを願ってやみません。



齋藤さんと難民母子

齋藤さんのように難民支援ボランティア(JELAラーニング・プログラム)にご興味のある方は、JELA難民支援係(jela@jela.or.jp)までお問合せください。どうぞよろしくお願いたします。

皆様のご寄付によって実施された 2018 年度の JELA の事業



いつも JELA 実施事業をおぼえ、尊いお祈りとご寄付を頂き、誠にありがとうございます。2018 年度に年間の皆様から頂きましたご寄付・賛助会費を感謝をもってご報告申し上げます。

2018 年度、皆様からのご寄付に JELA からの支出を加え、以下の事業を支援・運営いたしました。

- プレスクール建設 (カンボジア)
- カルカッタ貧困地域の女儿救済支援 (インド)
- サンパウロ貧困地域児童のための音楽ミニストーリー支援 (ブラジル)
- ワークキャンプ運営 (アメリカ / カンボジア)
- チャリティコンサート運営 (日本・JELC 17 教会)
- 熊本・広島の被災学生への給付型奨学金支給
- 次世代リーダー育成のための給付型奨学金支給
- 難民シェルター運営 (日本・都内 2 か所)
- リラ・プレカリア 6 期生修了式 (日本・ジェラミッションセンター) (*)
(* 研修講座運営は 2018 年度に終了いたしました。)
- 東日本大震災被災者支援 (*)
(* 2018 年度をもって定期的支援を終了いたします)

2019 年は、大規模改築工事を終えた難民シェルターの運営も開始いたします。

難民の方が日本での生活をスタートする重要な場所となることを思い、事務局一同、運営の開始への期待に胸を膨らませていきます。

JELA 事業内容をより充実させ、継続的な支援を可能にするために、2019 年も皆様のお祈り / ご寄付によるご支援をよろしくお願いいたします。

支援者一覧

(2018 年 10 月 1 日 ~ 2019 年 1 月 31 日)

青木孝士 / 阿部節子 / 荒井和子 / 安藤淑子 / ガイジェ / 石田陽子 / 石原京子 / 泉真琴 / 泉亮 / 井上秀樹 / 岩越優子 / 右谷孝子 / 梅田久子 / 浦和ルル学

JELA の活動にご支援を!
各種献金のご送金は下記をご利用ください。



ホームページからクレジットカードでご寄付いただけます!

院小中学高等学校 / 太田立男 / 大塚眞佐子 / 大嶺愛持・裸禰武・十六夜 / 河野悦子 / 北川勝弘 / 京谷信代 / 金銀淑 / 九州学院みどり幼稚園 / 工藤達晃 / 國本勝利 / ガレ恵子 / 小坂敦子 / 小松由美 / 権藤久喜 / 齋藤定義 / 齋藤実 / 酒井恵美子 / 坂本佳那恵 / 渋谷洋子 / 島宗正見 / 清水誉至子 / 新角房子 / 杉浦りえ / 鈴木辰典 / 鈴木やす / 聖ヨハネ布教修道会 / 神谷智子 / 金子佐人 / 京谷信代 / くまもとの夕べ / グリパッ・ロウエル / 武井順太郎 / 立山久美子 / 田中美紗子 / 玉名ルル幼稚園 / 東郷優子 / 中川愛弓 / 中川浩之 / 中村みゆき / 鳴海亮 / 西垣親子 / 西立野園子 / 野上きよみ / 野田マサ子 / 濱崎裕子 / 芳賀美江 / 針田ゆかり / 東牧子 / 深川育子 / 深澤理香 / 福駕知恵子 / 福地明子 / 淵田康穂 / 保浦晴也 / 保坂和子 / 前川隆一 / 前山貴史子 / 南節子 / 宗方美代子 / 村上裕子 / 森田雅子 / 森保宏 / LaFontaine / 安みぎわ / 山県順子 / 山口初子 / 山本了 / 八坂由貴子 / 若原奇美子 / JELC 大岡山教会学校 / JELC 大分教会 / JELC 蒲田教会女性の会 / JELC 甲府教会 / JELC 小石川教会 / JELC 下関教会 / シャロム会 / JELC 玉名教会 / JELC 徳田教会 / JELC 博多教会 / JELC 保谷教会

以上、順不同・敬称略。ご支援ありがとうございます。匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

編集後記

人の身体はなんと美事に、精巧に造られているのか。しばらく闘病生活にあった母の CT 検査画像を見るたび、やや不謹慎ながら、そう感嘆したものです。それぞれの機能を補充し合うかのよう、せわしく、せわしく機能し続ける人体のしくみは、聖書の示す通り神が人間を創造した、と信じるキリスト者でなくとも、なにやら愛すら感じてしまうほどの「神秘」ではないでしょうか。もとい、この身体のいとなみは、いつか必ず、最期の時を迎えます。4 頁でご紹介した「音楽死生学 (ミュージック・サナトロジー)」は、他者の終末期に立ち会って、音楽をもって身体のいかなる変化にも反応し仕えるための実践的学問です。その背景には、神に形づくられた霊肉をもつ人間の尊厳を守り、それに寄り添う「最後の愛の実践」という大主題があります。願わくは、一人でも多くの方が、各々授かった身体の精巧さの中に愛を見出し、その愛の源が何ものであるかという問いに明確な答えを見つけて下さいますように。祈りつつ、次号からは前任者を見習って、もっとくだけた編集後記を「かおるん」を名乗って載せてみようかしら、と思案しますが、肩の力が抜けるのはまだまだ先のようなです。(渡辺薫)

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association

一般社団法人日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523
Email: jela@jela.or.jp
HP: http://www.jela.or.jp
郵便振替口座番号: 00140-0-669206
加入者名: 一般社団法人日本福音ルーテル社団